

津波てんでんこ（1）

悪夢のような東日本大震災から、間もなく1年が経とうとしています。

私たちはあの震災から、学校における防災教育と平素の訓練が如何に重要であるかという教訓を得ました。特に、石巻市立大川小学校の悲劇は今後とも語り継いでいかなければなりません。

大川小学校では、全校児童108人の内7割が死亡・行方不明となり、また、教諭についても11人の内10人が死亡・行方不明という悲惨な事態となりました。

周辺の学校では少ない被害で済んでいますので、大川小学校における被害の大きさは特異であり、こうした悲劇の背景にはどのようなことがあったのか、しっかりと検証する必要があるでしょう。

地震が来たらまず高台に逃げる、これは安全確保の鉄則ですが、大川小学校の場合、避難開始の遅れは致命的でした。

どうしてそうなったのか。

まず考えられることは、防災計画の不備ということです。大津波を想定した避難場所が決められていなかったといえます。折角裏山があるのに、学校としてそこがどういう状況にあるのか把握していなかったというのも残念なことです。また、防災訓練もおざなりで、実効性のあるものではありませんでした。

次に考えられることは、リーダーの不在ということです。当日は校長が都合で学校にいなかったようですが、教頭はいたでしょうし、ベテランの教師もいたはずですから、緊急時に強力なリーダーの不在は避難の遅れにつながったのではないかと思います。教師が集まって今後の対応策を話し合ったようですが、一刻を争う中でなかなか方針が決まりませんでした。その間、子ども達を校庭に待機させ、いたずらに貴重な時間を浪費してしまいました。

更に、津波に対する危険性の認識が薄かったということでしょう。「山に逃げろ」と進言した保護者がいたということですが、結局その進言が活かされることはありませんでした。

何はさておいても子ども達の命は守るという、この大原則を大川小学校は守ることができませんでした。

一方、釜石市においては、津波襲来時に小中学校の管理下にあった児童・生徒は小学生1927人、中学生999人いましたが、全員無事でした。釜石の奇跡といわれる所以です。それは、偶然の結果ではなく、平素の防災教育と実践的な訓練の成果であり、「率先避難者たれ」いい換えれば、「津波てんでんこ」という考え方がしっかりと身に付いていたからではないかと思えます。

（塾頭 吉田 洋一）